

コロサイ人への手紙1章13-14節 「圧倒的な愛の支配」

1A 暗闇の力 13

1B 恐怖の霊

2B 諸々の霊と律法

2A 御子の支配 13

1B 愛する御子

2B 恐れを除く愛

3B 移された方

3A 御子の贖い 14

1B 対価による解放

2B 罪の赦し

本文

私たちの聖書通読の学びは、コロサイ書に入ります。午後にコロサイ 1 章前半部分を見ていきます。今朝は、その一部、13-14 節に注目します。「¹³ 御父は、私たちが暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。¹⁴ この御子にあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」

私たちは、前回、ピリピ人への手紙で、思い煩わないこと、そして、感謝と共に祈りと願いを神に知っていただくことについて学びました。私たちの心には、どうしても不安がやってきてしまいます。しかし、平和の神が共におられて、私たちの心と思いを守ってくださいます。

そしてコロサイ人への手紙をこれから学んでいくのですが、この町の人々がみな、恐れに満ちていた人々と言っても過言ではないでしょう。場所は、アジア地方にあるエペソから車で東に3時間ぐらいのところ、内陸に200キ。ぐらい、フリュギア地方の西にあります。すぐ近くに、ラオディキアやヒエラポリスの町があります。そこに福音が伝えられて、信者が増えていきましたが、ある問題がありました。それは、この町の人々は、いろいろな神々を拝み、天使礼拝も行い、またユダヤ人の律法主義もたくさん取り入れていたところでした。何でもかんでも取り込んでいたのですが、それは、大きな地震が紀元60年に起こったからです。

コロサイは、かつては貿易で栄えた町ですが、近くのラオディキアが繁栄してからは、衰退の道を徐々に辿っていました。その上に、地震が起こりました。そこで、自分たちが何か呪われているのではないだろうか？という漠然とした不安が起こったのです。この神に仕えなかったから、罰があったのかもしれないと思い、その神に仕えます。あの神にも仕えます。御使いにも仕えます。ユ

ダヤ主義にある、諸々の律法の教えを守らないといけないとも思います。そうやって、これをやらなきゃ、あれをやらなきゃ、という強迫観念に駆られてしまっていたのです。今、日本の国も、だんだん経済的な力を失っています。その上に、いろいろな災害が来れば、コロサイの人たちと同じように、不安に駆られて生きようになるのではないのでしょうか。

私たちが、イスラエルとトルコに行った旅行について、ある会合でお話をさせていただきました。クリスチャンではない人々の集まる会合です。その中で、私たちがイスタンブール空港に到着する頃に、イスタンブールでテロが起こり、私たちがイスラエルのエルサレムにいる時に、エルサレムでバス爆破テロが起こったことを話しました。それを聞いた時に、思わず、「何か、崇られているのではないか？」というような言葉が、聞いていた人の一人から出ました。これが、大体の人々の反応です。悪いことが一度だけでなく、二度も起こるといことは、何か悪い霊でもついているのではないか？と思うのです。

このような不安に駆られたコロサイの町で、教会が建てられました。しかし、福音によって生きていたはずのところに、キリストだけでは足りない、と言ってくる者たちがいたのです。異端が入って来ていました。今、お話した諸々の霊に仕えるように教えたり、律法の数々の規則を守らなければいけないと教える者たちが入り込んでいました。その問題を、コロサイの教会の指導者エパfrasが、わざわざローマにいるパウロに伝えにいったのです。それに応答して書いたのが、コロサイ人への手紙です。

私たちは、キリストを信じていると言っても、不安になることはないのでしょうか？立て続けに悪いことが起こると、神は自分を見捨てたのではないか？と思ったり、あるいは、「私には、これこれ足りないことがあって、きちんとやっていないから、こんな悪いことが起こったのだ。と」思ってしまうのです。こういった心の状態の時に、コロサイの教会の時と同じように、偽りの教えが入り込むのです。これこれをしなければ、あなたは十分ではないと教えます。キリストを信じていると言いながら、キリストだけでは十分ではない、満ち足りていないのです。キリストに結び付くことを教えるのではなく、これこれがいけない、あれがいけないといいながら、それを守り行うように命じます。

そこで私たちに、コロサイ人への手紙がとても必要になります。キリストだけで十分なのだ、ということを見せてくれる手紙です。この方が、すべてのものをはるかに超えて、すべてを支配しておられる方として登場します。英語ですと、Supremacy of Christ、キリストの至上性です。どんな力あるものよりも、はるかに力のある方です。実に万物を造り、支え、支配しておられます。どんな悪いことが起こっているように見えても、この方の圧倒的な力ですべてが動いています。しかも、愛によって動かしておられるということです。どんな悪いことが起こっているように見えても、神の愛から切り離されるものは何一つないのです。

1A 暗闇の力 13

初めに、「御父は、私たちが暗闇の力から救い出して」とあります。

この世は、明らかに暗闇の力や支配の中にあることを、聖書は教えています。私たち人間は、肉眼でしかこの世界を見られないので、そういったものの存在をなかなか認めることはできませんが、事実、そうなのです。使徒パウロは、第二コリントで、悪魔のことを「この世の神」と呼んでいます(4:4)。この世を支配しているものです。霊の戦いについてパウロは、エペソ書で、「6:12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」と言っています。そして、使徒ヨハネは、世全体が悪い者の支配下にあると教えます。「Iヨハ5:19 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」

イエスが捕えられる時に、この暗闇の力が背後にあることを、捕らえに来た者たちに言われました。「ルカ 22:53 わたしが毎日、宮で一緒にいる間、あなたがたはわたしに手をかけませんでした。しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です。」暗闇の力とは、神とキリストに反対する勢力であり、あらゆる悪の背後にある存在です。

1B 恐怖の霊

そんな暗闇の力の特徴は、人々を恐怖に陥れる霊だということです。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。」人を恐怖に陥れる、奴隷の霊ということです。ヘブル書には、もっと詳しくこう書いてあります。「2:14-15 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」人が罪を犯して、死に至るのですが、その死の力を悪魔が持っており、人々を死の恐怖によって一生涯奴隷としてつないでいる、ということです。イエスがその力から救い出される方として来られて、十字架の上で死なれた、ということです。

ところで、神々や霊と呼ばれるものの中にも、光と闇の戦いがあります。これらの神々は、あなたを闇から救い出しますよと約束します。しかし、神々にきちんと仕えないと、悪いことが起こる、罰が当たるということにおいて、全く恐怖から解放していないのです。そういった意味で、神々と呼ばれているもの、霊と呼ばれているものの多くが、光の中にいないどころか、暗闇の力そのものであるのです。どんなに良いもののように見せたとしても、死の恐怖によって奴隷にしているのです。

2B 諸々の霊と律法

そういった意味で、律法主義も暗闇の力の下にあります。ユダヤ主義に陥っているガラテヤの信

者たちに、パウロはこう言いました。「ガラ 4:9-10 しかし、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうして弱くて貧弱な、もろもろの霊に逆戻りして、もう一度改めて奴隷になりたいと願うのですか。あなたがたは、いろいろな日、月、季節、年を守っています。」律法を守り行おうとしている動機が、自分が何とか神を怒らせないように、一生懸命、その戒めを守るのだとするところに、かつての神々と呼ばれている霊に仕えていた時と何ら変わらない、ということです。そして、テモテ第一 4 章では、パウロははっきりと、「惑わず霊と悪霊の教え(1 節)」と断言しています。結婚をすることを禁じたり、食物を絶つことを命じたりしていました(4:2-3)。

2A 御子の支配 13

1B 愛する御子

このようにして、暗闇の力の中にいた私たちですが、「愛する御子のご支配の中」に今はいると、教えています。ここで大事なものは、御子が愛されているという言葉です。イエス様がバプテスマをヨハネから受けられた時に、天から声がしました。「マタ 3:17 これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」イエス様は、父なる神に愛されています。イエス様は、「父のふところにおられるひとり子の神」とも呼ばれており(ヨハネ 1:18)、独り子として父なる神に愛されているのです。

そして、この父が子を愛する愛の中に、私たちも招き入れられた、というのが、「愛する御子のご支配」なのです。ヨハネの福音書 13 章から 17 章は、イエス様が捕らえられる直前に弟子たちに語られたことばですが、イエス様は彼らを最後まで愛されました。彼らの足を洗われて、そして、彼らを愛する言葉をかけられました。「ヨハ 15:9-10 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい。わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっています。」イエス様の愛は、御父から来ている愛なのです。

2B 恐れを除く愛

先ほど読んだ、ロマ 8 章 15 節、「奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。」の続きは、こう書いてあります。「この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。(15 節)」アバは、お父ちゃん(papa)、という意味です。神を見る時に、お父ちゃんということのできるだけ、愛されていることを、心の奥底から知っているという、そういった御霊を受けたのです。

ですから、恐れは取り除かれています。ヨハネは第一の手紙で、こう言いました。「4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」ヨハネは、はっきり言っていますね、恐れには罰が伴っている、ということです。コロサイの人たち、また私たちが、「これこれをしなければ、罰が当たる。」という恐れのことです。しかし、愛はそれを締め出します。全き愛は、締め出すのです。

3B 移された方

12 節を改めてみますと、「**私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。**」と言っています。神は救い出し、そして移してくださった、とあります。

これはちょうど、イスラエルの出エジプトの出来事を思い描いているかのようです。霊の世界で、神は私たちをエジプトから脱出させてくださいました。イスラエルの民は、苦役の中で叫び声を上げていました。しかし、モーセとアロンがファラオに対峙した時に、「なぜ、そんなことをするのか？」と逆に、彼らをなじりました。また、エジプトを出て来てからも、紅海が目の前にあって、モーセにこう訴えました。「出 14:12 エジプトであなたに『われわれのことにはかまわないで、エジプトに仕えさせてくれ』と言ったではないか。実際、この荒野で死ぬよりは、エジプトに仕えるほうがよかったのだ。」なぜこうも、苦しんでいるエジプトに戻りたがっているのでしょうか？これは、恐れからです。奴隷の霊からです。もし、主人であるファラオに逆らうものなら、どれだけ恐ろしいことになるか知っていたので、事を荒立てないで、だまって苦しんでいる方がましだということなのです。

キリストにある自由を得ることは、このように勇気の要ることです。恐れから解放されて、愛の中に入るのですが、これまで恐れしか知らなかった者には、自分がそこから離れたら、自分が大変な目にあうという恐れに縛られているからです。しかし、信仰の一步を踏み出して、その愛の中に自分を投げ込むのです。私自身、キリスト教とは関係のない、神仏を拝む両親の下で育ちました。長男でもあり、キリスト信仰を持つことは、清水の舞台から飛び降りる思いでした。

そして、救い出されて、「移す」という言葉をパウロが使っています。これは、ある国がどこかの国に戦って倒して、その奴隷を自分たちの国に移送する時に使われていた言葉です。暗闇の支配、力から、愛する御子の支配に移すとは、サタンの国からキリストの御国に移されたということを意味します。先ほどの出エジプトでいうならば、イスラエル人は紅海を渡り、向こう岸に渡って、紅海に浮かんでいるエジプト軍の戦車や人間を見えています。もはやエジプトでの恐怖はなくなった、私たちは神の支配に移されたのだ、ということです。

しばしば、キリスト信仰を持ってから、自分が昔の生活と変わらず、また罪を犯してしまうので、まだ救われていないのではないか？あるいは救われたけれども、中途半端ではないのか？と誤ってしまいます。そして、救いというものを、あたかも、地獄から天国へ、徐々に移動するかのようにつまづきことがあります。これは間違いです。はっきりと、移されたのです。そこで、考えてみましょう。泥沼から陸に救い出されて、移された後に、まだ泥はついていますね。泥がついているので、まだ自分は泥沼にいますと思ってしまうのです。いいえ、移されました。泥がついているだけなので、ですから、あとは神の御霊によって泥を洗い清めていただければよいだけなのです。これが清めです。愛する御子の支配に移されたので、私たちはこの方のみことばによって、清めを受けます。

3A 御子の贖い 14

そして 14 節です、「この御子にあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」神が、暗闇の力から救い出し、愛する御子の支配の中に移される時に、贖いのわざを行ってくださいました。この贖いのわざがあったので、暗闇の力が砕かれ、私たちは解放されました。コロサイ書においては、この時にどのように霊の勢力が打ち砕かれたかをパウロが 2 章で話しています。「2:13b-15 神はキリストとともに生かしてくださいました。私たちのすべての背きを赦し、私たちに不利な、様々な規定で私たちを責め立てている債務証書を無効にし、それを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」支配と権威というのが、暗闇の力と支配です。これらを、キリストが十字架で血を流されたことによって、解除して、キリストご自身が征服した將軍として凱旋の行列の真ん中にいて、彼らを捕虜の列に加えられたということです。

1B 対価による解放

「贖い」とは、対価を払って買い取ることを意味します。奴隷市場に売られている者を、対価を払って買取り、自分のものにします。出エジプトでは、主は、子羊を屠って、その血を家の門柱と鴨居につけなさい、と命じられました。その血を見て、災いが過ぎ越しました。他のエジプトの家はすべて、長子、つまり長男が打たれて死にましたが、イスラエルの家には子羊の血があてがわれていて、そのために死を免れたのです。そして、その後で紅海を渡り、自分を奴隷にしていた力が打ち砕かれ、新しい神の民として移されたのです。

私たち人間は、罪によって死ななければいけないという恐れがあります。その恐れは奴隷になっています。しかし御子をご自身の血という対価によって私たちを、解放してくださいました。「黙 1:5b-6 私たちを愛し、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。」レビ記によると、血こそが、命そのものを表していることを述べています。血によって、御子のいのちそのものが対価となりました。私たちは、このような尊い犠牲によって、神のものとなされたのです。

2B 罪の赦し

そして、「罪の赦しを得ている」とあります。赦しを得ていないのは、ちょうど奴隷のようになっています。債務者に対して奴隷になっているような感じです。ですから、罪を赦すということは、その債務を帳消しにするような安堵を覚えます。解放を与えます。赦されたことによって、自分は即座に、罪と死の恐怖に閉じ込める暗闇の力から解放されて、愛された御子の支配に移されるのです。ダビデが、自分が罪を犯した後、それを告白して赦された時、いかに解放されたかを、こう述べています。「詩 32:1-2 幸いなことよその背きを赦され罪をおおわれた人は。幸いなことよ【主】が咎をお認めにならずその霊に欺きがない人は。」そして 7 節には、「あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で、私を囲んでくださいます。」とあります。救いの歓声です。自分の罪が赦されたことを、

天使たちが歓声をあげて喜んでいることを聞き取ることができるのです。もちろん、他の聖徒たちも歓声をあげます。

いかがでしょうか？みなさんは、何か罰せられるのではないかと思い、人から制裁を受けるのではないかと思い、それで動いていることはないでしょうか？それとも、罪赦されたということによる解放、そこにある救いの歓声を聞いているのでしょうか？ダビデは自分の罪を言い表して、罪の赦しを得ました。主は真実な方ですから、罪を赦し、すべての不義から私たちを清めてくださいます。